

木を真上から見るとのこと

松下 和美 (群馬県立館林美術館学芸員)

「高い所から失礼します。」この言葉から國府理のアーティスト・トークは始まった。2009年7月、群馬県立館林美術館での『エコ&アート—近くから遠くへ』展の初日、一人目の作家のトークが終わり、次の國府の展示場所に移動してみると、國府は4mほどの脚立の上のほったまま話し始めた。鉄骨を組み上げ、ランプ、シャワー、空調機をとりつけた温室で木と芝生を育てる作品《Typical Biosphere》は、アイデア誕生からの時間的な限界のため未完成だった。そのため観客と距離を取りたかったのかもしれない。あるいはパフォーマンスサービスのような心持ちもあったかもしれない。しかし振り返って思うのは、その立ち位置から次に発せられた、「ここから、普段見られない、木を真上から見るといことができるんですね。」という発言は、國府らしい視点を示していたのではないか、ということである。「なかなか、木を真上から見るといのは不思議なもので—」と続く彼の言葉を、しかし私は聞き流し、本題へ急いで入ろうと、作品の構想についての質問へとシフトしたのだった。

《Typical Biosphere》は、アメリカのアリゾナの砂漠に建設された施設において1991年から2年間行われた生態系のシミュレーション実験「バイオスフィア2計画」をアイデアの源としていた。トークで國府がこの計画に触れて述べたのは、科学的には閉じられた空間で循環システムが成り立つと言われていたものの、食料不足が発生した時に被験者である研究者たちは問題を押し付け合い、人間関係が悪化して実験は失敗に終わった、というものだった。「土地が均等に与えられ譲り合って生きていたら皆が幸せになる、それが僅かな場所でもできなかったということ。これは地球上で起こっていることと重なる」。地球環境をテーマにしたこの展覧会において國府がトークでまず指摘したのは、地球の問題というのは、人が土地で生きることに起因するものなのだ、というシンプルながら根本的な事柄だった。

本展の終了直後、國府は、兵庫県立美術館において《てっぺんの庭》を発表する（『神戸ビエンナーレ2009招待作家展 LINKしなやかな逸脱』）。私が見たのは会期始めの頃だったが、7mの鉄塔の上のドウダンツツジの木の庭は、周りのデッキの上から眺めてみると、重厚なコンクリート建築に浮かぶ小さな理想郷のようだった。國府はこの作品のサイズについて、「もしも自分が降り立ったとしたら土地と呼べるくらいの広さのものが欲しかったので」と語っている。¹ 必要にして十分な大きさに切り取った土地に育つ緑、人工的な構造物のなかのその庭に、彼は鳥の目線で夢を託したのではなかったか。

高い所から改めて國府の作品について考える機会を得たのは、2011年、ヴェネツィアにおいてある。國府は、パラッツォ・フォルチュニーを会場とするグループ展『TRA: Edge of Becoming』に出品していた。「間」を意味するイタリア語 (tra) のタイトルの通り、古今東西のアートを巡る旅としての本展には、実に多様な作品群が展示されており、ようやく最上階にたどり着いたときには閉館までもう少しという時間だった。國府の作品を探して目に入ったのは、赤いレンガの壁を背にひっそりと佇む白いパラボラアンテナの上の緑。展覧会の企画者アクセル・ヴェルヴォールト氏のヴェネツィアの別荘の土を使った—國府自身にとってそれは“足元の砂(土)をすくう”—という意味深い行為となったという—その地面には、おそらく当初種をまいたディコンドラではない、雑草が、ごく自然に生えていた。次回のシャワー(水やり)の時間を監視員に尋ねると、イタリアならではのだろうか、たちまち何人かのスタッフ寄ってきて話が始まり、内容は分からないが作品が皆に愛されていることだけは伝わってきたのだった。

翌日の夕方、ヴェネツィア滞在の最後の少し余った時間つぶしに、サン・マルコ広場の鐘楼に上った。頂上からは美しい水路と、狭い土地にびっしりと建つ家々が、夕方の光に照らされてよく見える。そして、建物の屋上や中庭に置かれた植木鉢の豊かな緑まで目に入った時、前日に見た《Attic Garden (屋根裏の庭)》もそれらと根本的に同じではないかという思いがしてきたのだった。水上の人工都市で人々は緑を必要とし懸命に育てている。この土地の性質からおそらく長い間そうしてきたことだろう。一方15世紀の建物の屋根の下に置かれたパラボラアンテナの庭は、明らかに未来的な様相を示し、人の手が介在しないかのような別次元の庭であったが、土の中の植物とこの土地に生きる人の双方にとって、そこには生の時空間が息づいているのである。高い所から眺めたときに立ち現れてくる、人と緑が共に生きる土地の景色は、國府が想像し、思い描き、作品に託した世界へとつながるのではないだろうか。

「充分に上から眺めたなら、飛び降りよう／重力に従って、それぞれのすむ場所へ」。もしあの時、木を真上から見た眺めについてもっと尋ねていたら、どんな話が聞けたのだろうか。

1. 『國府理 作品集』アートコートギャラリー、2011年、p.24

2. ヴェネツィアでの展示については、アートコートギャラリーの大場美和氏にご教示頂いた。

3. 作家コメント、「KYOTO ART MAP 2008 國府理展」DM、アートスペース虹、2008年